

1 胆江医療圏域における地域医療の課題について

項 目	御 意 見
地域医療構想	<p>地域医療構想に関して、今、新市立病院問題で県が行う構想と市が考える構想（計画と言ったほうがよい）、この地域医療構想について、多くの医療機関が混乱している。県として行う地域医療構想をきちんと説明してほしい。</p>
地域医療構想 調整会議	<p>以前に比べれば病病、病診間の連携は進んできている。しかし、地域医療構想を考えると、未だに進んでいないのが現状である。 奥州市における人口減少、疾病構造の変化を考慮した上で、各々の病院機能の状況（強み・弱み）をさらけ出し、市全体を今後どのようにすべきかを検討する機会がない。開業医の参加も十分でない。在宅医療も含めた検討が必要と思われる。</p>
	<p>地域医療連携会議でありながら、病院機能のあり方みの議事であり、その他の医療資源の活用等、特に開業医、薬局、歯科との連携が全く考えられていない。 行政（市）主導で地域医療・介護を横断的に活用する案の議論が必要不可欠である。</p>
	<p>地域医療構想に関する会議は、2～3ヶ月毎に開く必要がある。（今まで行われていなかった部分を取り戻す意味でも）各々の病院の期の割合、紹介率、逆紹介率のデータを持ち寄った詳細な検討が必要である。</p>
	<p>この会のような病院関係者と行政担当者による忌憚のない意見交換を行うことができる機会が提供されていることは有益であり、人口約15万人の医療を担う上で必要な情報交換の場である。 今後、さらにそれぞれの医療機関が個々の症例あるいは案件に対して「真摯に紳士に（淑女に）」良好な情報交換が可能になるようなシステム構築が必要である。 県内の他の医療機関で始められている「医療情報ネットワーク」に類似したシステムの構築も必要になる。</p>
	<p>胆江圏域地域医療連携会議に出席していると医師会と行政（県）とが密に連携をとる必要があると感じる。</p>
	<p>行政の重要な役割を考えると、市民の安全・安心に関わるセーフティネットとして教育・福祉・医療の分野については、市がどのような状況になっても最低限守り続けていかなければならないものである。そのことを考えていくうえでも、市として市民に対する医療の確保を堅持していかなければならない。 総合水沢病院は、そのような市民に対する医療の確保という観点から今でも重要な役割を果たしてきたものであり、今後の責任も大きいものとする。 市民ひいては胆江二次医療圏の医療の今後の確保という観点から、また、これから考えていかなければならない医療と介護との連携や、危機的な状況にある医療資源の配分という観点からも、患者視点に基づく機能分担や連携が大きい意味を持つこととなる。 ただし、県立病院、市立病院、民間病院、開業医等の様々な立場がある中で、市が独自に「このような方向に進めたい」と言うことは、権限的にも出来ないものであり、そのためにも県が地域医療構想を策定し、地域医療構想調整会議を開催して、その中でそれぞれの機関がそれぞれの考えを議論しあい調整していくことで、今後のあるべき姿を探っていくということになるものと考えていることから、県には主導的な役割を担っていただき、調整を進めていただきたい。</p>

項 目	御 意 見
役割の明確化 連携	本医療圏の医師数の問題がある。今後医師の数が増えることは難しいので、地域での連携が欠かせない。
	病病連携、病診連携を円滑に行うためのターミナルセンターの設置、急性期・回復期・慢性期機能の病床配分を協力して行ない、地域完結医療を目指す必要があるのではないかな。
	合併して奥州が誕生した訳であるが、県立、市立の公立病院が近接して存在しそのままの体制で診察している点が問題。国が進める地域医療構想をもとに地域医療計画をしっかりと立てて各病院の果たすべき役割を明確にすることが必要ではないかな。
	圏域人口減少の中で、現在、12万程度の人口の中で公立病院が4院、公立診療所が2ヶ所あり、各々の特質がオーバーラップしている部分が多くあり、一方、したがって、必要領域でカバーされていない部分はこの公立施設もカバーしていない現状がある。
	各病院の地域医療に関わる機能の明確化と相互理解 <ul style="list-style-type: none"> ・各医療機関に重複した機能があることの認識とその合理性の説明と理解 ・各医療機関が提供できる医療内容の明確化 上記について地域の諸機関と住民への周知 <ul style="list-style-type: none"> ・胆江圏域で終結すべき医療とできる医療についての認識共有 ・コーディネーター機能の必要性の検討
	各病院の機能を明確にし、ベット数も含めた協議が必要と考えます。それにより看護師数の配置が決まり、少ない人材の中でどのように活用（施設職員も含め）できるか考えていけるため。
新市立病院	医療資源の重複を可及的であってよいので回避する。 開業医の医療資源としての評価が必須である。
	公立病院の合併や統合の議論を速やかに深化させるべき、「県」もさることながら「市」がイニシアティブをとって問題解決にあたるべき。今までを振り返ると「ある目標」（言うまでもなく、市民が安心して受診できる病院の現実）達成への情熱も真剣さもほとんど感じられない。
在宅医療・ 介護	水沢病院の今後の役割について、そういった課題を総合的に鑑みて対応してもらえるように期待している。また、医師会、歯科医師会、薬剤師会の方々にも是非ご協力してもらい、良いものを作っていただきたい。
	水沢地区、前沢地区における在宅医療が手薄であること。急性期病院退院後の受け皿となる病床が乏しいこと。
	訪問診療を行う医師が少ないことも問題になっていると感じる。胆江圏域では入院できる病院が市町村と比較して多いことが影響している部分があるかもしれないが、そういった環境が「在宅医療へシフト転換」という国が示す社会保障体制における医療と市民の認識との乖離を起こしている可能性がある。
	受診が困難な要介護者の増加の対応が大変になっている。江刺、前沢、衣川の診療所はあっても、そこまで行くのが大変な方もいる。
	人口呼吸器装着等を受け入れる通所・入所サービス施設が少ない。
	胆江医療圏の中核となる県立胆沢病院を中心とした役割分担や地域の医療施設との連携の推進に加え、今後の社会情勢の中で需要増加が見込まれる在宅医療に対する取り組みや介護と医療の連携の仕組みづくりについても検討を行っていく必要がある。
	高齢化がますます進行する中、高齢者に対する医療は施設入所を中心に進められているが、高齢者の多くは住み慣れた地域の中で家族とともに暮らしたい願いを持っており、また、施設から家族へという政策があることから、家庭において医療が受けれるよう、在宅医療の充実を望みます。

項 目	御 意 見
周産期	二次医療圏を複数集めて「周産期医療圏」を設定している。胆江地域は両磐、岩手中部に頼っているが、距離、交通の便を考えると住民にとって安心して子供を作るのには問題がある。
	県南地区の病院に産婦人科の医師不在は大問題、難しいことかもしれないが、確保に努めてほしい。
	高齢者については、介護施設、訪問介護、訪問診療等、充実した方向にあります。少子化が問題となっている今日、県立胆沢病院に産婦人科が無いなど、安心して出産できる状況でないことに不安を感じます。 故郷出産したいとのことでインターネットで検索したところ、近くは中部病院と済生会病院しかなく、中部病院は定員オーバーで不可、済生会病院で受け入れていただき無事出産したということを知っている。 周産期医療体制には力を入れていただきたい。
その他	周産期医療など先進地区に比し遅れている分野があり、いくらかでも充実するよう努力するのは当然のことである。しかし、現在当地区の住民が享受している医療は他の地区と比べ決して見劣りするものではなく、むしろ恵まれているとも考えられる。満点を目指し、不足分を嘆き続けるなら、永遠に不幸であろう。足るを知るのも大事ではないだろうか。
	認知症の対応について、市でも認知症の予防として認知症カフェや認知症食の対応を行っているが、効果が明らかになっていない部分がある。と同時に認知症専門医が少なく、また既存の病院、診療所等での対応がうまく出来ない課題があり、認知症対応の入口と出口が同じなため、その数の対応が大変になっていると感じる。
	高齢化社会対策も大切であるが、少子化対策、若者が定住できるようなインフラ整備等のまちづくりの計画が立っているのかが疑問である。お金はどこに消えているのでしょうか。
	医療界の内外を問わず、新市立病院に関する議論・意見の中には少なからず、”自分ファースト”なるものが見受けられる。これを一掃して、地に足がついた議論を行わなければ、地域医療そのものが画餅に帰することを危惧する。
	今回求められた意見等は、市の評価会議や県立病院運営協議会でも何度も取り上げられている。この質問に有意があるのか。